



Hinkel, Eli(ed.). 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning: Vol.3.*
Chapter 5. “English for Specific Purposes”

0. 発表の構成 (目次)

- 0. 発表の構成
 - 1. 著者情報
 - 2. 論文の構成
 - 3. 本文の内容
 - 4. 提言
- 参考文献

【おねがい】

このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育コースの授業「日本語教育方法論演習」（授業担当者：南浦涼介）での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning.* の発表のレジュメです。
教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>) までお願いいたします。

1. 著者情報 (共著)

- Brian Paltridge (シドニー大学教授)

専門 :

TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages)、談話分析、アカデミック・ライティング、ESP など

著書 (一例) :

Paltridge, Brian. 2017. *The discourse of peer review: Reviewing submissions to academic journals.* London: Palgrave Macmillan.

- Sue Starfield (ニューサウスウェールズ大学教授)

専門 :

応用言語学、言語教育学、高等教育など

著書 (一例) :

Starfield, Sue and Brian Paltridge. 2016. *Getting published in academic journals: Navigating the publication process.* Michigan: Michigan University Press.

2. 論文の構成

Introduction	はじめに
Genre and ESP	ジャンルと ESP
Corpus Studies and ESP	ESP におけるコーパス研究
Ethnographically Oriented Research	民族誌学的研究
ESP and English as a Lingua Franca	リンガ・フランカとしての英語と ESP
Spoken Discourse and ESP	話し言葉の談話と ESP

ESP and Undergraduate Academic Literacies	ESP と学部教養
ESP and Advanced Academic Literacies	ESP とより高度な教養
Occluded Genres and ESP	「表に出ない」ジャンルと ESP
Identity, Learner Needs, and ESP	学習者のアイデンティティ/ニーズ研究と ESP
Future Direction	ESP 研究の展望

- ・基本的性格はレビュー論文（「学習者のアイデンティティ/ニーズ研究と ESP」の章からはやや筆者の主張が感じ取れる）
 - ・ specific purpose の解説書ではない：「各章＝specific purpose」ではない
- 各章の内容は、「ESP の教育・学習がどのようなアプローチで研究されてきたか」

3. 本文の内容

3.1. はじめに

- ・ Gollin-Kies' (2014) : ESP の「研究法」に焦点を当てる
- TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages)や応用言語学のような従来の研究領域では量的研究が優勢であったが、近年は書き言葉の談話分析に焦点を当てることで質的研究が優勢になってきたと主張

3.2. ジャンルと ESP

- ・ ジャンル (genre) ≠個々の specific purpose →では「ジャンル」とは？
- 例えば...

Specific purpose	Genre
法律	法文書 (条文など) 学術論文 特許申請書 etc.
医学	学術論文 カルテ 他院への患者の紹介状 etc.
技術 (工学系)	操作マニュアル 学術論文 特許明細 etc.

- ・ ジャンルという概念が ESP の分野で論じられるようになったのは 1980 年代～ (Swales が代表的)
- ・ 以後、「談話分析とジャンルの関係」「ESP 研究におけるジャンルと言語の関係」「ESP におけるジャンル分析の多様性」など、様々な視点で ESP におけるジャンル研究は行われてきた
- ・ 今日の ESP におけるジャンル研究では、多様なジャンルのテキストの記述が研究対象となる (特にこれから社会に出る人たちに必要なデジタル領域のジャンル分析など)
- ・ また、テキスト記述の分析だけでなく、ジャンルの社会的意義 (social action) や各分野におけるジャンルの役割についても論じられている

3.3. ESP におけるコーパス研究

- ・コーパスはその「漏れのなさ」と規模ゆえに、ESP 研究に大いに貢献している
 - ・ Michigan Corpus of Academic Spoken English
：学術的ジャンルで話される言葉や、その話者の属性などに関するデータ
 - ・ British Academic Spoken English Corpus
：会議でのプレゼンテーション、講義、セミナー、学術的領域の関係者へのインタビューなど
 - ・ British Academic Written English Corpus
：論述課題の出た授業の詳細、書いた学生の年齢や性別、書かれた文書の評価など

→ これらを ESP 研究に利用することで、語句の出現回数や頻度の把握だけでなく、より文脈を考慮した研究結果の理解が可能となる

- ・ British Academic Written English Corpus を活用した研究の例：Nesi & Gardner (2012)
→ コーパス分析やインタビューなどを行い、対象のテキストが 13 のジャンルに分けられることを発見

3.4. 民族誌学的研究

- ・ ESP 研究において、民族誌学的アプローチは増えてきている
- ・ 他のアプローチとの組み合わせにより、ESP の言語使用実態をより文脈に沿って捉えることができる
：対象となるテキストが、社会においてどのような状況下で生み出されたか、など
- ・ Handford & Matous (2011)
香港の建設作業現場における日本人と広東人の会話や、彼らへのインタビューを録音
→ コーパス（の技術を取り入れたデータ）を作成
→ 彼らの「日常英語」と「ビジネス英語」を比較
- ・ 他、Matous (2015)、Chun's (2015) などの例
- ・ 本論文の著者 Paltridge & Starfield も ESP への民族誌学的アプローチをレビューしている (2016 年)

3.5. リンガ・フランカとしての英語と ESP

- ・ 最近の *English for Specific Purposes* : 掲載論文の著者の出身国がおよそ 20 カ国に及ぶ
→ 英語の母語話者は少数であり、いまや確実に ESP 研究は英語圏だけのものではないといえる
- ・ リンガ・フランカ : 複数の言語が話されている一定の地域（集団）において、そこに属する人たちが相互にコミュニケーションをとるために用いられる共通語
- ・ Jenkins (2014) : 学問的領域におけるリンガ・フランカとしての英語（特にそこでの言語政策）
- ・ Nickerson (2005) : ビジネスシーンにおけるリンガ・フランカとしての英語
- ・ Hincks' (2010) : 学問的領域でのプレゼンテーションにおけるリンガ・フランカとしての英語
：英語が堪能な 14 人のスウェーデン語母語話者に、各言語で同じプレゼンテーションをさせる
→ 英語のほうが話すスピードが遅く、また内容も薄い
→ 学問を行う場面（講義や討論など）での言語を英語にしよう（という国も実際に出てきた）

3.6. 話し言葉の談話と ESP

- ・ 今日、話し言葉の談話が注目を集めてきている—Handford & Matous (2011,2015)、Lin's (2015) など

- Morton (2009) : オーストラリア大学の建築学専攻の学生と教員を観察・インタビュー調査
結論 : 学生は研究発表をする際、構想を説明したり施設を案内したりするだけでは不十分。プレゼンテーションに物語性をもたせることで、聞き手との間に相互信頼を築き、また聞き手に視覚的なイメージを与えられるため、構想の豊かさや複雑性をスムーズに伝えることができる。
→ 見ると (ある個人にとって) 日常的なジャンルでも、そこで何に価値が置かれ、どのようなプレゼンテーションが効果的であるかを知るためには、日常とは異なる視点で考え直すことが重要
- Chang & Kanno (2010) : 英語が堪能な、様々な分野の博士課程の学生を調査
結論 : 言語能力の重要性は、学問分野やそこでの研究実践、メンバーによって様々である。また指導者は、英語の母語話者でない学生が母語話者の学生に対して何らかの劣等感を抱いているとは思っていない。
→ 一般的に母語話者でない学生が直面すると思われがちな課題が、実際にはあるとは限らないということ認め、各分野の内部の人間の視点でその人たちの学術的活動を捉えることで、より深い理解と彼らへの適切な対応が可能となる

3.7. ESP と学部教養

- Leki (2007) : あるアメリカの大学の学部生を 5 年にわたって調査
 - ・ 学生は、自身の学問分野において求められる教養とどのように向き合うか
 - ・ 自身の英語力やライティングの授業は、その求められる教養と向き合ううえでどのように役立つか
 - ・ 彼らはその学問領域 (の談話) にどのように入門するか
 → インタビューや彼らの書いた文章の調査
→ 学生が、自身の身を置く社会、文化、あるいは学術的であり社会政治的でもある環境の複雑さをどのように乗り越えるかがわかる
- 他の研究例 — Curry & Hanauer's (2014) や Wingate (2015) など

3.8. ESP とより高度な教養

- 「より高度な教養」 : 学術的により深い教養 & 学生の現在および将来のために必要な教養
 - 第二言語で何らかの出版物や論説、あるいは博士論文を書くための教養を含む
- まだ世界と「つながっていない」、英語を母語としない学生にとって、英語でそうした文章を書くということは単に言語 (能力) 的な問題にとどまらない
 - : 今日、世界的に英語は優位な位置づけにあるとされ、英語を母語としない学生もその認識は少なからずもっている
 - 彼らは、英語で文章を書くことで自身を世界に発信したいという思いと、そもそもの英語の優位性に対する抵抗意識 (desire to resist) との狭間で自身のバランスをとっている
 - 言語 (能力) 的な問題があるだけでなく、彼らの価値観やイデオロギーにも関わる
- Paltridge, Starfield and Ravelli : 視覚芸術および舞台芸術の分野における博士論文を調査
 - 学生が書いたテキスト自体について理解するだけでなく、学生がそれを「なぜそのように書いたのか」を探ることで、彼ら (Paltridge, Starfield and Ravelli) が自身の学生たちに、より適切なアドバイスを与えられるようになることを目指す

- ・ Curry & Lillis (2013) : 多言語話者が、他者からの援助によって、英語で自身の主張を世界に発信するチャンスを広げるための方略を提案
- ・ その他の研究例 — Li (2006a, 2006b, 2007)、Hyland's (2015) など

3.9. 「表に出ない」ジャンルと ESP

- ・ 「表に出ない」ジャンル：博士論文の審査レポート、ジャーナルの査読レポート、プロモーションや終身雇用要請書など
- ・ Starfield *et al.* (2016) : 博士論文の審査官は学生に何かを指示する場合には命令形を用い、より明確な説明を求める場合には疑問形を用いるなどの特徴を発見
- ・ Paltridge (2013b, 2015) : *English for Specific Purposes* の査読レポートを調査
→記述内容の変更を求める際には、指示、提案、明確化の要請、あるいは勧告をするような表現が用いられるが、多くの場合それらは理解しにくいものとなっている。また審査レポートの書き方については、他のジャーナルの審査レポートを読んで学ぶタイプの人と、実際に何度も審査レポートを書き、経験を積んで学ぶタイプの人がいることがわかった
- ・ Hyon (2008)、Chen & Hyon (2005) : プロモーションや終身雇用要請書などを調査

3.10. 学習者のアイデンティティ/ニーズ研究と ESP

- ・ Belcher & Lukkarila (2011) : 教師は、生徒の長期的な目標の達成を手助けするために、彼らが（英語の学習を通じて）どのような人になりたいか（imagined identity）、そしてそのために何を必要としているか（needs）を理解しなければならない
→ESP の教育・学習におけるアイデンティティ/ニーズ研究は、社会的変化の重要な一端を担う
- ・ 学習者の日々の言語活動や自身の目標についての発話に着目することで、彼らが自身のアイデンティティについてどのように認識しているかを知ることができれば、教師は彼らに「何をさせるか」だけでなく「それをどのようにさせるか」まで考えられるようになる
→学習者が自身のビジョンをより鮮明に描く手助けになる
- ・ Dörnyei (2009) : 学習者が第二言語を通じて実現したいと考えている「自己」を把握するためには、以下の3点を知る必要がある
 - ・ 理想的な L2 Self : 学習者が（第二言語を通じて）どうなりたいか
 - ・ 当然なるべき L2 Self : 学習者が理想の実現のために何を持っていなければならないと考えるか
 - ・ L2 学習経験 : 学習者自身が行っている第二言語学習が上記の二つにどのように関係するか
- ・ このような研究は英語教育の分野で行われてはいたが、ESP においては注目度が低かった
- ・ こうした研究は、学習者が自身の望むフィールドにおいて周縁的な位置づけに留まらないようにするための方策を示してくれる

3.11. ESP 研究の展望

- ・ 書き言葉、話し言葉、あるいはデジタル領域のジャンルにおける研究の余地
- ・ 学部の学生のニーズに関する調査
- ・ English for professional academic purposes (EPAP) に焦点を当てた研究（増えてきている）

- ・学習者の（学問や労働の領域ではない）日常的なコミュニケーションのニーズの研究（移民への言語教育など）
- ・ESP の教育者に求められる専門性とは何か（どうすれば ESP の教育者になれるか）
- ・母語話者との関係

4. 提言（考えたいこと）

- ・今日、学問の分野はかなり多岐にわたっている。世界のあらゆるモノ・現象・概念が学問の対象になっているといってもよいかもしれない。ゆえに、specific purpose は（それを大学のような機関で研究する動きさえ起これば）すべて specific academic purpose と言い換えることができる訳であり、ESP は須らく EAP になり得るとさえいえる。であるとすれば、ESP と EAP の明確な線引きはどこにあるのか。あるいは、明確な線引きがないとすれば、両者の関係はどのようなものなのか（例えば包摂関係にあたるのか、あるいはほとんど同義で、文脈によって使い分けられるのか、など）。
→授業内ディスカッションや自身の発表の省察から、発表者は、EAP は個々の specific purpose における所謂「ジャンル」の一つと考えるべきであろうという結論に達した
- ・Japanese for specific purposes という概念は存在するか（どのようなものか想像できるか）。
→日本語は英語ほど大規模なリング・フランカとはなり得ないが、日本語が使われる場面が多岐にわたり、また使用者が日本語母語話者に限られない以上、Japanese for specific purposes という概念は存在すると考えられる
- ・発表の省察シートより：
授業内ディスカッションにおいてもそうであったが、省察シートでもやはりアイデンティティーやニーズに関するコメントが多かった。本授業の受講者の大半が何らかの形で教育に関わる（あるいは関わろうと考えている）人であり、「学習者のアイデンティティーとニーズ」に日常的に意識を向けている人たちであることから、このような現象が起きたと考えられる。

参考文献

Paltridge, Brian and Sue Starfield. 2017. "English for Specific Purposes" In Hinkel, Eli(ed.). *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning: Volume 3*. New York: Routledge. pp.56-67.

ニューサウスウェールズ大学ホームページ「Professor Sue Starfield」
<<https://education.arts.unsw.edu.au/about-us/people/sue-starfield/>>. 11, June. 2017.

シドニー大学ホームページ「professor Brian Paltridge」
<http://sydney.edu.au/education_social_work/about/staff/profiles/brian.paltridge.php>. 11, June. 2017.